作者に出会う漢詩授業

― 白居易「香炉峰下、新卜山居草堂初成、偶題東壁」を教材に ―

教育デザインコース　国語領域
宮田　滉大

１　はじめに

平成28年8月26日に、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会から「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」が発表された。これにおいて、高等学校国語科に関しては、講義中心の学習形態や、生徒が学習内容から自分の考えを形成し、表現する活動、そして古典に対する学習意欲の低さが課題として指摘された。このような現状を打破すべく、「主体的・対話的で深い学び」を目指した学習指導が求められ、教師のより一層の資質向上が求められている。

こうした状況を踏まえ、漢文教育もまた、従来の句法中心の学習に留まらない、新たな枠組みのもとで取り組んでいかなければならない。今回発表者が行った実践は、これからの「主体的・対話的で深い学び」を実現するための、漢文教育における一つの提案である。作者の人生を踏まえて漢詩を読むことで、漢詩の深い理解を目指した。

２　方法

本実践は論者の出身高校で行った。群馬県の公立高校の２年生文系クラス（３８名）にて行った。なお、公立の男子校であり、卒業生のほとんどが４年制大学へと進学する。

【第１回】
・グループで「香炉峰下」の書き下し文を書き、現代語訳を考える
→グループ学習によってハードルを下げる

【第２回】
・白居易の人物像について学ぶ
・中国と日本の文化の関係について学ぶ
→古文と漢文をリンクさせる

【第３回】
・「香炉峰下」を白居易の人生と重ねて読む
・現代における漢文を読む意味を考える
→読みの比較を通して考えを形成

３　結果と考察

本実践終了後、生徒に授業に関するアンケートを行った。ここではその感想の一部を紹介したい。

・今まで感じられなかった作者の人が見えたり、人生観を感じることができた
・作者の人生について知ることで読みやすく、理解しやすくなった
・漢文を違った視点から見ることができた

これらの感想から、生徒は作者を踏まえて漢詩を読解することで、漢詩だけを読んだ場合ではできなかった漢詩の理解をすることができたことが分かる。このような多角的な理解が漢詩の深い理解と言える。

また次のような感想も見られた。

・今の自分にも通じるところがあった
・自分の人生に活かしていきたい

こうした感想からは、生徒が自身の人生に漢詩・漢文を関わらせていこうとする態度が伺える。単なる受験勉強の一部としての漢文の学習ではなく、漢文それ自体の面白さに生徒は気づけたようである。

４　おわりに

漢詩の深い理解は生徒の考えの形成を促す。生徒が単に正解を暗記するような授業ではなく、生徒が考えを形成することのできる授業を行うには、教師自身の創意工夫が欠かせない。今後の漢文教育、ひいては国語教育の発展のため発表者も研鑽を積んでいく次第である。